

たんほ  
**田圃の中の徘徊塾**  
はいかいじゆく

古市 憲一

一、昭和十六年十二月八日

太平洋戦争勃発の日、私は七歳の子どもでした。

骨董品のラジオのガー、ザーッという雑音にま

じって、

『本、未明我が帝国陸海軍は東太平洋上に於いて戦

闘状態に入れり……』

という緊張感のある男性アナウンサーの声を登校直前の朝、聴いたことを今でもよく憶えています。

田圃地帯の真只中にある菅葺きの田舎家の古いながらも妙に磨き上げた板場（今でいうリビングルーム）の上で、小学校二年生の私は、

「何か大きなことが始まったのかな？」という胸さわぎを覚えながら聴いたことを思い出します。

戦争が終わったのが昭和二十年（一九四五年）の八月十五日。それ迄足かけ五年間、六年生になるまでずっと戦争中という時代背景の中で私は子ども時代を過ごしたことになります。

私には、妹が三人いました。

よく子守りをさせられました。子守りをしながら、島仕事の手伝い、水汲み、薪割りなどあれこれと父や母に指図されながらしたことを思い出します。

中でもお風呂の水汲み、風呂炊きは私に割り当てられた毎日の仕事でした。

私の田舎家は、稲作を主とした田畑の中に集落があるという土地柄、つまり見渡す限りの田圃たなぼの中、道添いに十数軒の農家が軒を並べているという典型

的な農村集落、その中の際立って古い萱葺きの大きな蔵屋敷がわが少年の家でした。

碁盤の目状に縦横に走る田舎道にそって巾二米程の小川が流れている美しい田舎でした。川の水が農業用水となり生活用水にもなっていました。

お風呂の水汲みはその小川の水を汲む仕事でした。屋敷の裏手側がその小川に直接、接しており屋敷の裏口の石段を何段か降りると川の水が直接汲めるようになっていました。

かなり大きなブリキのバケツで川の水を汲み上げては裏口の土間を通して風呂場の窓から風呂釜に注ぎ込む仕事、これが憲一少年の夕べの日課でした。

風呂場の窓が少年の身の丈程の高さにあるためバケツを、

「エイ!! ヤッ!!」

と気合もろとも、全力で持ち上げないと窓に届かず苦労したものです。

家添いにある小さな川には水藻が生い茂り、メダカや水すまし、鮒などの川魚が群遊するなどのどかさがあったよっていました。

当時はどの家も、汚水や下水を川の中に流さなかつたので川底まで透き通り川藻がゆらゆらと流れに身を任せるきれいな小川でした。

小学唱歌、「春の小川」に出てくる牧歌的な川そっくりの風情でした。

お風呂の水汲みはつらい日課でしたが、その川での鮒つり、川海老捕りなどは少年にとっては日常的な楽しい遊びでした。

川の中にふわりと浮くように泳いでいる鮒の口ですぐそば迄、御飯粒をつけた釣り針を近づけると、パクリと御飯粒だけ食べて逃げる練達の鮒、逆に針ごと勢いよく呑み込んでくれる鮒など「鮒釣り」は楽しい遊びでした。

釣竿が屋敷裏の部屋の窓からも出せるところが気



に入って、雨の日などは部屋の中からも鮒釣りを楽しんでました。

鶏の餌やり、これも幼き憲一少年の日課の一つでした。鶏は屋敷のはずれの畑の中に父が手製の小屋を建てて七、八羽飼っていました。

餌はきまってる、大根の葉や「しいなとう（野草）」を小さく刻んだものと、蝗いんこでした。

蝗は稲田に行けば無数にとることのできる鶏にとっては貴重なたんばく源でした。

夕映えの中、黄金色こがねいろに光る稲穂のあちこちにとまる蝗の一匹二匹を素手で掴んでとる極めて初歩的、原始的な蝗とりでした。

とった蝗は竹筒の先から布袋の中に押し込む。その袋の中に百数十匹程たまったら、畔道を小走りに鶏小屋に直行したものです。

手のひらの中で捕えた蝗が逃げださんとはかりに



激しく動くすぐったいような感触は、今でも遠い日の思い出になっています。

小学校五年生の頃になると、飲み水汲みの仕事にそれに加わりました。

ブリキで作った二つの水桶けを天秤担ぎにして近くの村営の浄水場まで行き、帰りは肩に喰い込む痛さを我慢して片道十分の道のりを担いで帰るといいうのが仕事でした。小学生の私にはこれが一番つらい苦しい手伝いでした。

小川の水はそのままでは飲めないのです。どうしても

濾過した水が必要でした。一家の生命線を支えなくてはという気持ちがあつたからこそ二日に一度というこの重労働に耐えることができたのだと今もなつかしく思い出しています。

## 二、子どもざかりは遊びざかり

よく遊びました。

手伝いの合い間をぬって近所のメンバーと組んずほぐれつ。群雄割拠、きょうの味方は明日の敵、喧嘩もよくしました。

五寸釘の先を砥石で鋭利にした大小何本かの釘を持って、庭先の地面の上に突き立てては二、三人で陣取り合戦の遊び。

ジャラジャラとガラス玉（ビー玉）でポケットをふくらませて集まり地面においた相手の玉に、自分の玉を投げて当てたら相手の玉が我がものになると

いう「コッチン」というビー玉遊び。

武者絵などが印刷されている厚紙の札を蜜柑箱みかんばこの上に置き、手に持った同類の札を勢いよく叩きつけて置き札を裏返しにしたら我がものになる「パッチン」という遊び。

中でも、藁ぐるわらぐる（脱穀済みの稲藁を積み重ねたもの）を陣地にしたリ陣取り遊びが白眉はくびでした。晩秋から初冬、肌寒い西風が吹く頃、藁ぐるのある田圃に出ての鬼ごっこに隠れんぼを併用したような走り回り遊びは敵味方入り乱れた、藁の中の決戦もあって人気のある遊びでした。

学校の帰り道、道添いに流れる小川に棲む水鳥（かいつぶり）を、棒切れと小石で追いまわして遊ぶ「追い詰め遊び」もよくやりました。五、六人の同輩共が川の兩岸にふたて二手に別れて、水面を逃げまどう水鳥に石を投げ投げ棒を振り回して追い回す。

殆どの場合、水中深く潜水するため逃げられて戦果はないのだが、翌日また追い回すのを楽しみに服を水だらけにして遊びました。

こうした群狼の如き徘徊遊びで学びとった危険の予知能力とそれを避ける反射神経、突発的な変化にも素速く対処できる行動力、トラブルを収める調整力、チームワークをとることの重要性等はこうして大人になった私にとって今も大きな効用をもたらしているような気がします。

戦争が始まって戦争に終わった子ども時代、貧しくも不幸な時代であり、物不足、食糧不足でつらい厳しい時代でもありました。

田舎暮しであった為、直接戦禍には遭わなかったものの戦争の悲惨さは子ども心にもよく焼きついています。



毎日毎日、黒いうどんとかぼちゃ、時たま麦だらけの麦ごはんが馳走。フライパンで焼いた輪切りのさつまいもが最高のおやつという時代でした。

敗戦後五十二年、一部屋一台のTV、商品は街に溢れ、車の洪水に情報の氾濫、今の私たちはあまりにも豊かすぎる時代を生きています。

骨董品のようなラジオに耳を寄せてきいた「鐘の鳴る丘(ラジオドラマ)」の時代、釘やビー玉を遊び道具にした時代に戻りたいとは思いませんが、子どもざかりは遊びざかりであること、この原理だけ

は生かし続けていきたいものです。

子ども時代でなければ得ることのできない人生のパスポート、それが「遊びから得る生きる力」だと思うからです。

喧嘩して負けてもくじけず、トラブルが起きた時にもうまくまとめる力、チームワークをとるために独創的なグラウンドールをつくりみんなで守っていく能力などは、子ども時代に山野、路地裏の徘徊塾、遊び塾に何年も通ってはじめて手にすることのできる、素晴らしいパスポートだと思ふのです。

どんなに机の上で本を読み参考書の問題を解いたにしても決して手にすることのできぬ大切なパスポートだと思ふのです。

受験塾や進学塾に行かなくてもすむ時代を創ること。大切な人生のパスポートを得るための子ども同志の遊び塾を大きく世に出すためにも私たち大人は心に思い定めて、初等教育から大学教育に至る教育

の在り方、入学試験の在り方について徹底的な変革を断行していかなくてはならないと思ひます。

変えなくては変わらない。

改めなくては改まらない。

進めなくては進まない。

今進んでいる今世紀最後の教育改革こそは子ども時代でなければ手にすることのできないパスポートを発行し得る改革にしたいものです。

今や遠い思い出になった子ども時代、広い田園には爽やかな風が、今も吹いています。

(日本教育政策提言機構・夢塾主宰)